特殊型そでなし資料の分析

国立民族学博物館収蔵標本による(9)

山　崎　光　子

Analysis of Special *Sodenashi* for Working Clothes: Specimens in the National Museum of Ethnology (9)

Mitsuko Yamazaki

はじめに

家着型そでなしと荷運び用そでなしについてはすでに報告したが[1]，そのほかにも用途や形状や素材の面で特殊なそでなしがいくつかあり，ここではそれらを考察の対象とする。なお，幅狭い袖のつけられた佐渡の裂き織りのツヅレもこの特殊型の中に含めた。

研究方法

研究方法はこれまでの報告と同様である。

結果と考察

資料3－1　〔品名〕刺子チョッキ

〔標本番号〕H 32038（衣類G－2－14）

この資料は次の資料1－5とともに京都の商店から購入されたものである。資料1－3・4と同様なそでなしで，紺無地に全面の刺し子，縞布の掛け衿と肩当てがあるが，その上にソリ引き用らしい当布が左脇部分から右肩に斜めにのび，肩でコハゼどめにしてあることが他と全く異なるため特殊型とした。その布と襠布は白糸で太々と美しく刺子してある。身丈はやや長く，男子用であろうか。当布を胸にとめてみると，胸囲りは85㎝位となった。

形状はかげ衿，二幅仕立てのそでなしに襠もとってあり，馬のりもついた労働衣服である。羽織って着たのではなく，打ち合わせて紐で内と外と結んで外衣として着ている。当布の端にコハゼが3ケ，右肩にコハゼどめの太いより糸が計7本かけられているので，長さを調節しながら着用したものであろう。右胸の当布の下になる部分や，左脇部の紐むすびで引っ張られた部分や背部分の藍の色が少しかすれておちているが，布の摩擦による損傷はあまりない。刺し方も粗いため，手ざわりはやわらかい。へりとりは，脇明きと襠上部，衿下（かげ衿に少しかかっている），馬のり部分で，裾には裏側のみ幅広いへりとり布がけぬき合わせでつけてある。

いずれも平織り木綿で，身頃，襠，へりとりなどは地厚の紺布，衿や肩あてはやや薄手の2枚の縞布である。糸密度はおよそ，紺木綿は経緯とも〔20本／㎝〕位，縞は経〔30本／㎝〕緯〔20本／㎝〕位であった。

色は身頃の藍色は〔3PB 1.5／4 dark blue〕衿，肩当ては黒地〔N 2 grayish black〕に黄緑色〔10Y 6.5／10 olive yellow〕の縞である。布には継ぎ目は見あたらないが，表裏の布が異なり，特に裏は色にむらがあり（汗などで色落ちしたものかもしれないが），残り布を用いたものと思われる。

身頃の刺し方は粗雑で，左右の刺し方も異なっている。左身頃には刺し縫いの角ごとに結び玉をつけて一つの模様のようにみせているが，右身頃にはそれがなく，縫い目もやや粗い。左右が異なる人によって刺し子されたものであろうか。刺し方は身頃中央から，左右に放射状に模様がわかれている。表の針目が若干小さい。刺し糸は，太い右撚りの2本糸で〔16～18針目／10㎝〕の針目で〔12～13本／10㎝〕の間隔で刺してある。当て布と襠ははっきりと模様を意識して刺しているが補強のためでもあり，太々とした右撚りの糸2本どりで丈夫そうにしっかりと刺している。布幅にあわせて刺したため，布の裁ち端は糸が表から裏へとまわっている。布の厚みは1.1㎜，重さは535ｇであった。

縫い方は，いずれも右撚りの紺糸，背と脇のみは2本どりで，〔8針目／10㎝〕の合わせ縫いののち，〔5針目／10㎝〕の伏せ縫いになっている。へりとりの始末は1本どりで折り伏せ縫い〔9針目／10㎝〕であるが，裾裏のへりとりは〔8針目／10㎝〕の伏せ縫いで，端の始末は耳ぐけ〔5針目／10㎝〕や，折り伏せ縫い〔6針目／10㎝〕であった。肩当て布は背中心は〔7針目／10㎝〕，両脇は耳であるが〔10針目／10㎝〕で

細かく伏せ縫いがしてある。衿のまつりぐけは〔6針目／10㎝〕であった。

裁ち方は付図のように推定される。当て布に襠が裁ち合わされているようである。衿肩明きにも白糸の刺し縫いがしてある。残りはへりとり布あるいは他の紐をとったのかもしれない。もっとも，裏面も藍染であり，いろいろ組み合わせて使ったのであろうから，裁ち方にはあまりこだわらない方がよいかもしれない。衿は他の布と組み合わせたものであろう。表総用布は約420㎝であった。布幅は刺し縫いしてあるためはっきりしない。

資料3－2　〔品名〕貫頭型労働衣服

〔標本番号〕H 16648（衣類F－5－11）

珍らしい貫頭型労働衣服である。地方名はクビヌキで，『魏志倭人伝』に出ている原始的な貫頭衣を思わせるが，形状は異なるかもしれない。

鳥越憲三郎氏（日本生活文化史学会会長）の談によれば，衿のあきは前に開く型と横に開く型があるが，本資料が後者に相当し，前者に分類されるこれまでの資料と異なる。我が国は前開き型の系譜で，したがってこの資料は珍らしい特殊型といえよう。

採集地は島根県周吉郡中條村大字原田，1934年5月25日岩井亀千代氏により，ジバン，パッチ，背中当てなど他の4点とともに採集されている。

貫頭衣型で，頭が入るよう衿明きも大きくくって明けている。織るときにすでにくりを意識していたらしく，衿の上部は細い飾り糸を織り入れてあり，両脇部分も裁ち切らず，折り返してある。衿下のやや丸みを帯びたくりの部分だけ両側に，資料2－2の肩部分の始末と同じように前後から布を当て縦刺しして織りのほつれるのを防いでいる。惜しいことに，肩部分はほぐれて切れてしまっている。したがってこれは更生品ではなく，初めからはっきり一枚の衣服として意識しており，裂き織り部分も後下側に2本の縞を配している。後裾は織り端布で始末されているが，前側は織りが解けてしまったので当て布をして簡単に刺している。しかしそれさえもすり切れて中布がのぞいている。へりとり布も，元はどれかがわからないほど何度も取り替えられたらしく，縞あり絣あり，紺，茶，無地などがつけられている。衿に泥らしいものもついている。前後の身頃は布製の紐が襠の代りにつけられている。

素材の裂き織りの経糸は，左撚りの白木綿糸1本，緯糸も細い木綿布を裂いて織り込んである。色は，元は紺糸の濃淡だったと思えるが，全体に黄変してしまっている。

糸密度は，裂き織り布は経〔7～8本／㎝〕緯〔4～5本／㎝〕，へりとり布は経〔22本／㎝〕，緯〔19本／㎝〕である。緯は裂き布だけで綿糸などは入っていない。やや甘い織りで，高機によるものかもしれない。布の厚さは1.6㎜，重さは330ｇであった。

縫い方は丁寧である。よく見えないが，白い右撚りの木綿糸1本どりで，へりとりが〔5～6針目／10㎝〕で伏せ縫いしてある。

裁ち方は，付図の通りである。用布は約150㎝であるが，裂き織りの貫頭衣の仕立てには少し無理があるようにみえる。布幅は33㎝であった。

資料3－3　〔品名〕袖無袷長着

〔標本番号〕21480（衣類F－3－2）

この資料は，採集地の記録はないが山形県の衣類と続き番号であった。備考として仕事着，表紺無地木綿，裏縦縞綿ネルとある。文部省史料館から移管されたものである。長着の袖をとり肩あげしたもので，そでなしというより労働用具の一つと云えるかもしれない。裏側の一面にしぶがたくさんついていて，おそらくぜんまいとり用の衣類兼袋であろう。これと同じ形状のものが，新潟県南魚沼郡大和町桐沢では最近まで使われていた。古くなった着物の袖をとってそのまま用いたもので，上半身をたっぷりとゆとりをもたせて着て，腰紐をしめ，胴部に袋をつくりそこにぜんまいを採りながら入れ，ある程度の量が貯えられるととり出し，また採集するという。また隣村大和町大倉では，袖つきの上半衣で片袖を特に大きくつくり，その中にぜんまいを採って歩くという少し異なる形状のものであった。これらの採集運搬法は，県内の他地域にもあり，全国のかなり多くの地域でとり入れられている方法かと思われる。

形状は別衿つきそでなしで，ハレの着物のように丈の長い身頃を持ち，肩に3.5㎝ほどの肩あげがつまみ縫いしてあり，肩幅を狭く，しかし身幅にゆとりをもたせてある。

品名は袷であるが，布を2枚重ねて単に仕立ててある。刺子衣ではないが，腰の採集物を入れる部分が傷んで切れたため，後から布をあてて横刺ししてあり，労働用に縫い直したと思われる。しっかりとした素材で丈夫につくられている。

素材は，表は丈夫な浅黄木綿で褪色が著しく，明るい青味灰〔10B 7／2（light bluish gray）〕になっている。もとは職人などが用いた印袢纏だったのではないだろうか。腰部分に2本の染筋がうすくみえる。裾部分は大きくない布を何枚か集めてつぎたして

ある。衿の裏側にも屋号と名前らしいものが裏文字でうすくみえる。衿は以前の衿山を少しはずして裏返しにかけてある。

藍の色は青味黒〔10B 2／2（bluish black)〕と濃く，丈夫そうである。肩あてはにぶ青〔10B 3／6（dull blue)〕，表の後側に大きく初めからしっかりと縫いつけられている。

裏布は綿ネルの長着の古着らしい布一種類で，黄味灰〔7.5Y 8／2（yellowish gray)〕地に鈍い灰〔N 3（dark gray)〕の細い4㎜程の格子柄である。破れた部分のはぎは表裏共，紺無地木綿である。

厚さは身頃2.08㎜，衿2.92㎜，重さは730ｇであった。

縫い方は背・脇ともに〔11針目／10㎝〕の合わせ縫い，衿下と脇明きは，縫い代が2㎝と幅広く，折り伏せ縫い2本，裾は1.5㎝の縫い代で折り伏せ縫い1本が〔9針目／10㎝〕位で縫ってあった。脇明け止りには長さ5㎝程へりとり布をあて，丈夫にしてある。

刺し目は表がやや小針で〔10針目／10㎝〕である。衿肩明き止りの部分に，太い紺木綿糸2本で3本ずつ放射状に刺し模様があった。

裁ち方は更生布のため推定するにふさわしくないが，用布は約500㎝であった。

資料3－4　〔品名〕ツヅレ

〔標本番号〕27178（衣類F－2－4）

資料3－5　〔品名〕ツヅレ

〔標本番号〕27185（衣類F－2－4）

このツヅレの2資料は，他の多くの資料と共に新潟県佐渡郡相川町田之浦において1960年11月21日，古河静江氏によって収集されたもので現地名も「ツヅレ」である。

地機で，経糸がみえないほどにかたく織られた裂き織布地で，袖は半幅でありながら丈長の平袖という佐渡特有の形をもっている。使い古されたようには見えないが，資料3－4の衿がやや汚れており，新品ではない。

佐渡では主として海府地域の山仕事などに用いられたと云われており，個人の収集家によって同種のものが数多く収蔵されている。

形状はかげ衿型，半平袖で，へりとり布が衿，袖口，裾，衿下，さらにふりや身八つ口や，資料3－4の方は馬乗りにまで，すなわち全ての開口部にていねいにつけられている。前者は丈の短い上半衣形式で後者は丈が長い。

素材の裂き織りの経糸は太いきなりの右撚りの麻糸で，織り方が緻密なためはっきりみえないが，緯糸のさいた紺木綿布の間に経と同じ麻糸を一往復させることでより堅く織り上げている。糸密度はいずれも経〔9～10本／㎝〕緯〔8～9本／㎝〕である。裂き布は濃淡のある藍染の古木綿布を用いている。袖部分は特に半幅に織り上げたものでなく，並幅に織ってから半幅に裁ち切り，麻糸で千鳥がけでほつれ止めをしてあるが，織り方がかたいため解ける様子はない。

縫い糸は藍に染めた麻糸2本どりで半返し縫いしてあるが，縫いずれで藍色のとんでいるところもある。衿やへりとり布も紺の麻糸1本どりで折り伏せ縫いの始末がしてある。

裁ち方は布幅31㎝の裂き織り布を資料3－4は約350㎝，資料3－5は約470㎝用いている。布の厚さは部分によってやや差があり，色あいも場所によってやや異なるが，縫い方，布端の始末などの同一であることからみて，同じ裂き織り布で2枚のツヅレの仕事着をつくったものではないかと思われる。

ま　と　め

1. 資料の情報

ここでは特殊な形のそでなし（狭い袖つきのものも含めた）5点を対象とした。すなわちそりひき専用の刺子のチョッキ，わが国では珍らしい貫頭衣型の裂き織りのかたあて，ぜんまいとり専用のそでなし長着，細長い袖のついた山仕事用の裂き織りのツヅレである。呼称については貫頭型のクビヌキと裂き織りのツヅレ以外ははっきりしない。採集年次，採集地も両者のみで，前者は昭和9年に島根県で，後者は昭和35年に佐渡で大量に採集された中の2点であるが，そりひき用そでなしは山形県における採集であろうし，ぜんまいとりそでなしは，古着利用の点からみても全国各地に散在していた形式であろうがいずれも古い。

2. 資料の分析

a. 形　状

形状は特殊型を集めたため，貫頭衣衿あり，かげ衿あり，別衿ありで，また襠や襷布や袖がついたり，身頃も一幅仕立て，二幅仕立てがあり，身丈も長短があるなど多様である。そでなしの機能が衣類の範疇をこえて拡大するにしたがってその形状も自由に変化していくことが可能であり，衣類にしては特殊な要素をもつ形状といえよう。

b. 材　料

労働にかかわる衣類の素材は，裂き織りであっても刺子であっても，またどのような形状であっ

ても木綿布が用いられており，更にそれ以前の織物を推察させる麻糸や左撚り糸なども時折みられる。染め色も紺の濃淡が大半であるが，古いものはほとんど藍染である。

布の糸密度は手織か力織機によるかにより異なるが刺し子の場合は布の全面に刺し縫いして一枚の布素材となる。裂き織りの糸密度，すなわち織り方には地域性がみられる。それは各々の地域の労働の内容とのかかわりの中で生み出されたものかもしれない。しかし刺し子は勿論，裂き織りにも，それを作る人の創造性を生かすための自由裁量の余地は充分にのこされている。厚さや重さはそれらによって異なる。

縫い糸は木綿糸が多いが，裂き織り布に麻糸の用いられている時は縫い糸にも麻糸を使うこともある。撚りは右撚り，色は地色にあわせて紺色が大半である。糸の本数は同じ衣類の中でも２本どりにしたり１本だけにしたりする。

c. 縫い方，裁ち方

縫い方は刺し子の場合は合わせ縫いや，合わせ伏せ縫いが自由に出来るが，裂き織りの場合は厚地のため縫製に工夫がこらされており，ここでのツヅレは半返し縫いがなされている。針目はいずれも10cmあたり８針目前後と粗い。

裁ち方は一幅仕立て，二幅仕立てとあるがそでなし形式のため単純で，必要に応じてその他の附帯部分の布を裁ち合わせる。用布も形状や身丈，用途によって全く異なり，その差はそでなしの身頃だけでも３倍あまりとなることもある。裂き織りの布幅は，細い幅の種類をのぞけば，地域差はなくほぼ30cmあたりに一定している。これは人体を被覆する時に必要な寸法から必然的に割出されたものであろう。

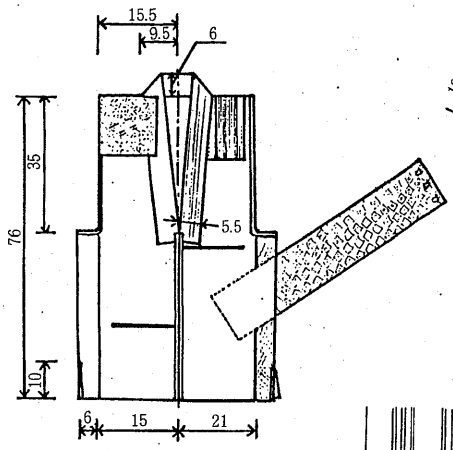
謝　　辞

この報告は国立民族学博物館の労働着に関する研究の一部である。

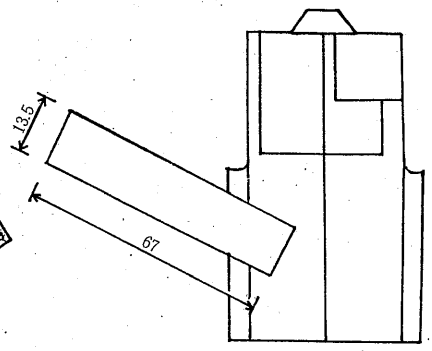
御指導頂きました共同研究代表の中村俊亀智教授をはじめとする各共同研究員の方々，ならびに資料の利用に御甚力下さいました国立民族学博物館，情報管理施設の方々に心から御礼を申し上げます。

文　　献

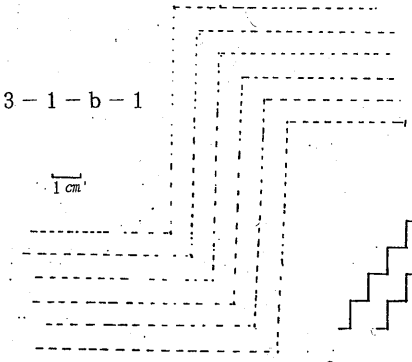
1）山崎光子：家着型そでなし資料の分析，荷運び型そでなし資料の分析－国立民族学博物館収蔵標本による(7)，(8)。県立新潟女子短期大学研究紀要№23，37～57，1986.



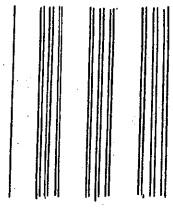
3－1－a－1



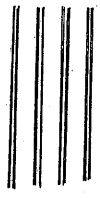
3－1－a－2



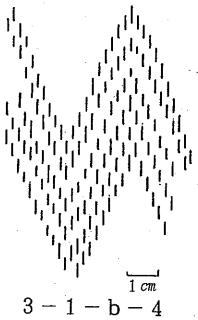
3－1－b－1



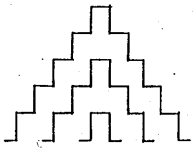
3－1－b－2



3－1－b－3

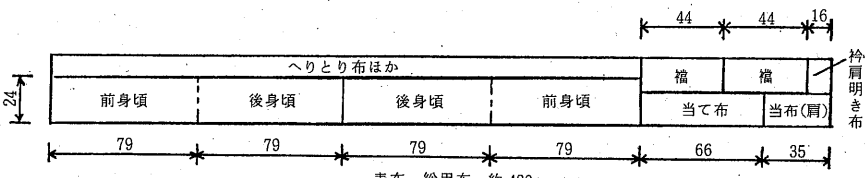


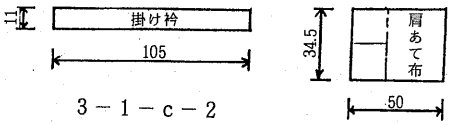
3－1－b－4



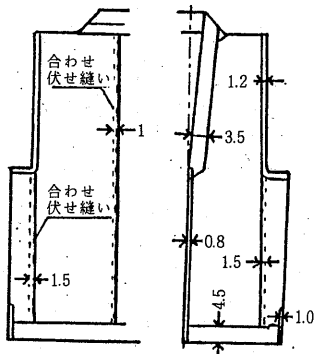
3－1－b－5　1 cm

3－1－b－6　1 cm





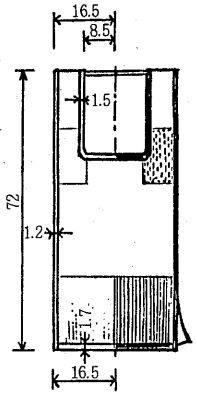
3－1－c－2



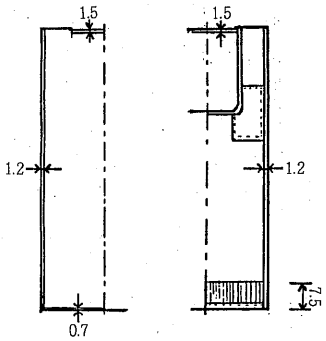
3－1－c－1

資料3－1　〔品名〕刺子チョッキ　〔標本番号〕32038

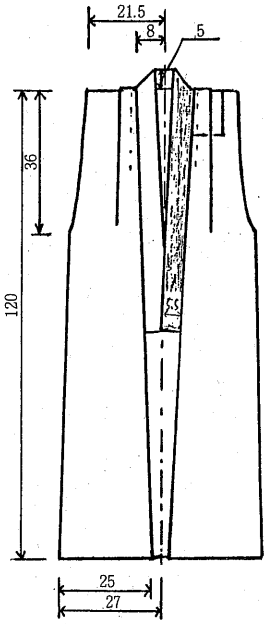
3－1－a－1　形状図，前
3－1－a－2　形状図，後
3－1－b－1　身頃刺し模様
3－1－b－2　肩当て布（左）の縞
3－1－b－3　衿の縞
3－1－b－4　襠，下部の刺し模様
3－1－b－5　襠，上部の刺し模様
3－1－b－6　肩当て布の刺し模様
3－1－c－1　縫い方
3－1－c－2　裁ち方推定図・全体図



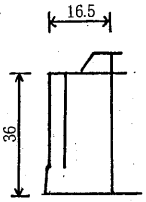
3－2－a

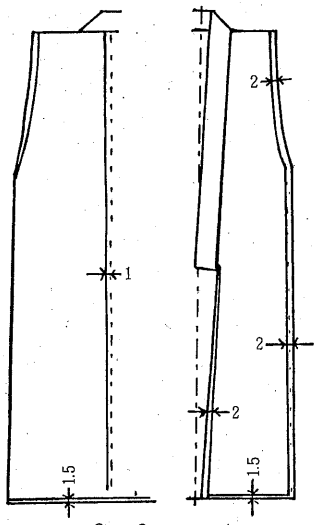


3－2－c－1

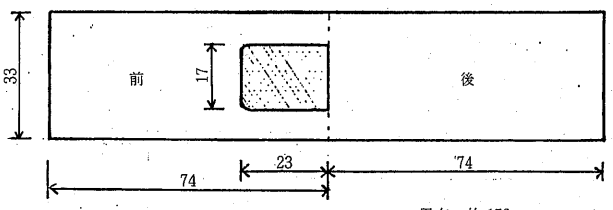


3－3－a



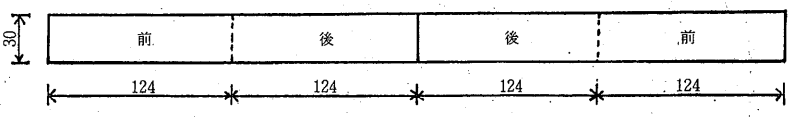


3－3－c－1



用布　約 150 cm

3－2－c－2

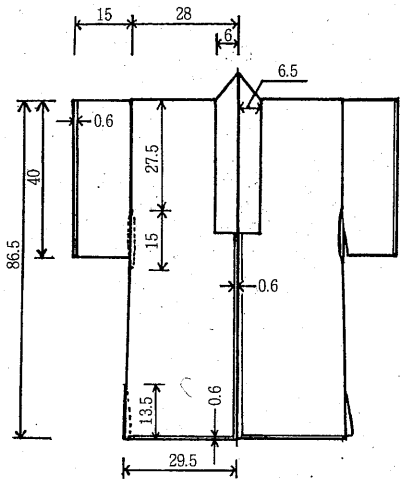


3－3－c－2

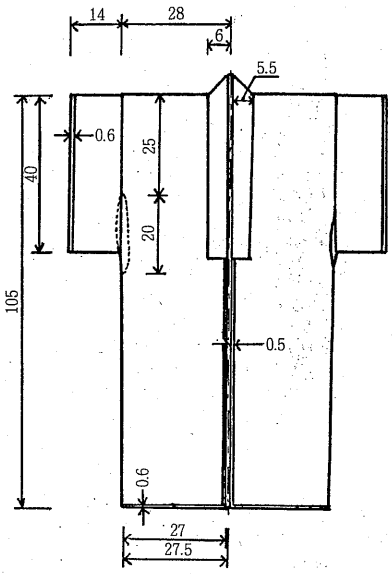
表布　総用布　約 500 cm

資料3－2　〔品名〕貫頭型労働服
〔標本番号〕16648
3－2－a　形状図
3－2－c－1　縫い方
3－2－c－2　裁ち方推定図

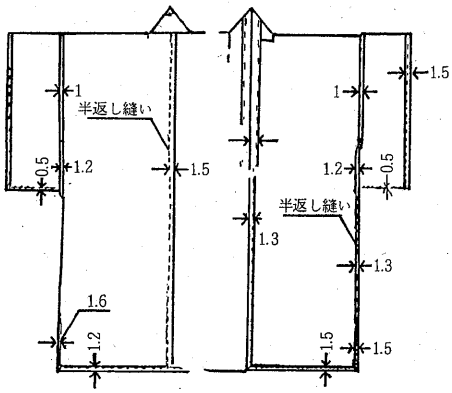
資料3－3　〔品名〕袖無袷長着
〔標本番号〕21480
3－3－a　形状図
3－3－c－1　縫い方
3－3－c－2　裁ち方推定図



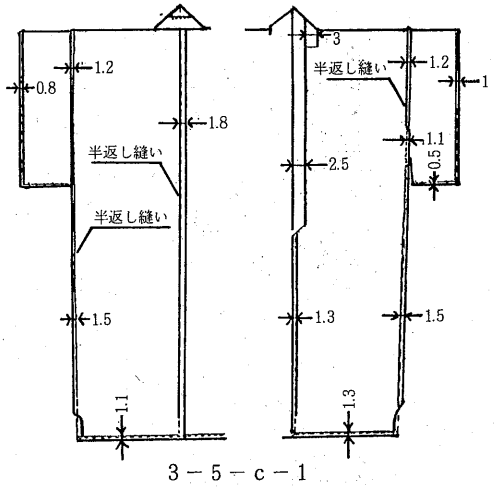
3－4－a



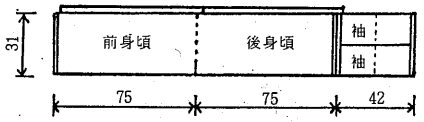
3－5－a



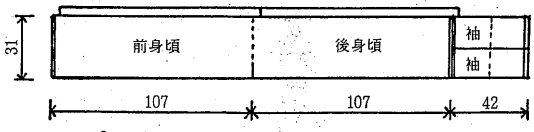
3－4－c－1



3－5－c－1



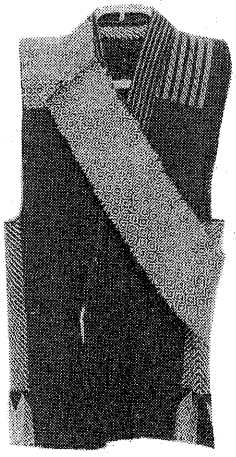
3－4－c－2　　総用布　約 350 cm

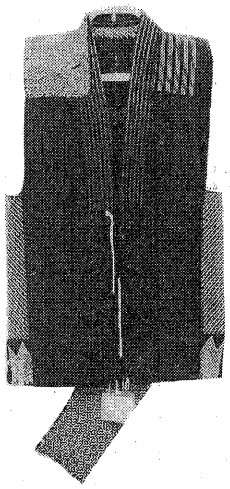


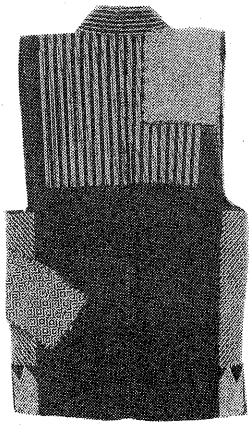
3－5－c－2　　総用布　約 470 cm

資料3－4　〔品名〕ツヅレ
〔標本番号〕 27178
3－4－a　形状図
3－4－c－1　縫い方
3－4－c－2　裁ち方推定図

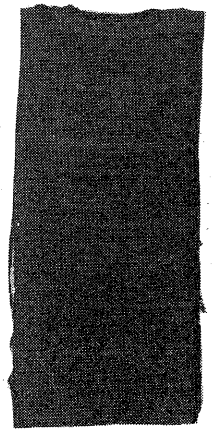
資料3－5　〔品名〕ツヅレ
〔標本番号〕 27185
3－5－a　形状図
3－5－c－1　縫い方
3－5－c－2　裁ち方推定図



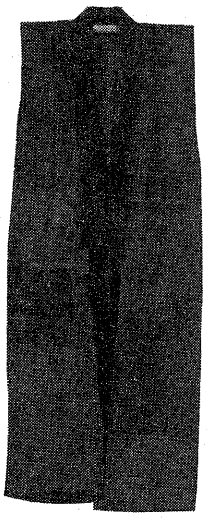


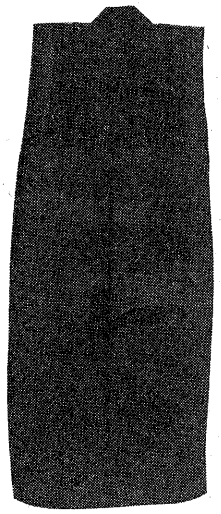


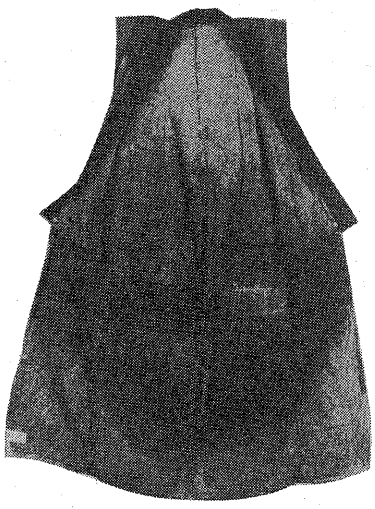
資料３－１　刺子チョッキ〔32037〕



資料３－２　クビヌキ〔16648〕







資料３－３　袖無袷長着〔21480〕

資料３－４　ツヅレ〔27178〕

資料３－５　ツヅレ〔27185〕